

嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第41号／1999年（平成11年）5月発行（年3回発行）

・発行所＝社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156-0055）TEL 03-3426-2323

ホームページアドレス <http://www2s.biglobe.ne.jp/~kisen/>

メールアドレス kisen@mrx.mesh.ne.jp

・発行人＝石井哲夫

・編集人＝五十嵐猛

人生福祉の実践家像

立正大学・人間福祉学科教授 杉 本 一 義

白馬の隙を過ぐるが如し。福祉の分野に足を踏み入れて四十年の歳月が矢のように去った感にうたれている。人間の福祉に情熱を燃やし身を灼く先輩との出会いで大学卒業までは夢だにしなかった人生となつた。

この道に入った頃は、福祉事業といえば、まだ聖職とみられる風潮があったように思われた。現在では、聖職という言葉もあまり耳にしなくなった。尊敬され信頼される実践家が少なくなってきたいるのではないかと思われてならない。人間相手の専門職業として、もしそうだとしたら問題ではなかろうか。

人間の「こころ」を暖め動かし、主体的な歩み出しを助長することを基本とする職業とは如何にあるべきか。いま、その根本のところが問われている。

この「問い合わせ」へ答えるために、聖職觀と職業觀（近代的）について、その概念を整理してみると、聖職としては（イ）物的報酬の超越、（ロ）自己を犠牲にして他に奉仕する、という点があげられよう。こうした行為であればこそ他からの尊敬と信頼を受けることになる。

これにたいして、近代的職業觀の特性としては、第一に（ハ）生活保障ということ、したがって（ニ）労働条件の問題が中心的にとりあげられることになる。生活が保障され労働条件が適切であればこそよりよい実践が可

能となるというわけである。こうした考え方にも一面の真理性を認めることができよう。

ところで、聖職觀の根底には本来的にその行為が当事者の（ホ）主体的哲理によって導かれるという意味があることを忘れてはならないのである。行為者の意志、哲学による場合、それは単なる自己犠牲ではなくなる。

さて、「物が増えただけ心が減った」という現在の状況の中で、福祉の分野でも施設設備や労働条件の点からいえば従来とは比較にならないほど改善がなされていると思われるが、その効果たるや、どうであろうか。

こうした問題意識において構想される人生福祉の実践家像とは、（イ）（ロ）と（ハ）（ニ）とを（ホ）の主体的哲理によって統合化するところに求められるのではなかろうか。

そして、（ホ）については、これを特定のイデオロギー、固定観念で決めつけるのではなく「人生福祉とは何か」との「問い合わせ」とともに問い合わせられるべきものであろう。

人生のそれぞれの時期に、人それぞれに固有の状況があり、それ相応の成熟がある。こうした個々人の自己実現を援助する事業にかかる実践家、それを支援する人びとのあり方について長考するこの頃である。

忙中の閑。意識の多様化と哲学の貧困の現在を思い、こうしたテーマをとりあげることの意義を感じているところである。

社会福祉施設の中で、入所施設への世間的評価が落ちるところまで落ちたという感じであり、どこを向いても地域福祉、家庭援助などという言葉が乱れ飛び時代となってきた。確かに今時の社会福祉施設などに肩入れをする人は少ない。私は、大学在学中に児童養護施設にアルバイトで、指導員として一年間働いたことがあったので、疑いもなく社会福祉とは社会福祉施設のことであった。又、社会福祉施設とは入所施設のことでもあった。

子どもやお年寄りが住む家がないときに生活できる家としての入所施設のありがたさは、当時の社会福祉の象徴であった。それがおかしくなってきた一つのきっかけは、障害児者施設が出来たことであつた。親がいても、そのそばから離して施設に入所させるのは、家庭に子どもをおけない事情が発生してきたからである。親が手のかかる子どもがいることから、他の子どもへの世話を行き届かなくなってきたたり、又周囲の人たちに迷惑をかけることが出てきて、生活の安定が乱されたからなのである。

昔は、家庭が地域の中で孤立していなかつたら、地域の人たちが障害児者をかかえている家庭の支援をすることになっていた。こういう当時当たり前であった地域共同体の互助体制が崩れてきたのである。その分施設の生活で保障することが出来るようになっていればまだしも、施設での生活は「最低限の生活を保障すればよい」という消極的な仕事の仕方

る。昔は、家庭が地域の中で孤立していなかつたら、地域の人たちが障害児者をかかえている家庭の支援をすることになっていた。こういう当時当たり前であった地域共同体の互助体制が崩れてきたのである。その分施設の生活で保障することが出来るようになっていればまだしも、施設での生活は「最低限の生活を保障すればよい」という消極的な仕事の仕方

社会福祉援助論

(その四) 石井哲夫

を考えるようになってきたのである。改めて言うまでもなく、社会福祉施設は、利用者が本来持つている不遇な条件を施設生活において、更に上乗せしてしまうようなひどい生活条件を認めてはならない。これらは国の文化、国民の良識が問われることであるはずであった。最近改めて施設批判が生まれたことは、むしろ歓迎すべきことと思つてゐる。

さて今日、社会福祉施設のケアにおいて、利用者の理解や、自己決定を求める援助を行うことの必要性を強調しているが、日常的に求められている生活の質を維持したり向上させることを無視してはならない。生活の質的な維持をすることも大変難しいことであるから、それを質的に向上させるなどということは至難なことと言えよう。生活環境の清掃にしても清掃

能力のない利用者と共に暮らしていくと、それを補う生活の仕方を考えなければならない。一番警戒しなければならないことは、職員が、利用者の生活に自我関与できなくなることであろう。袖ヶ浦のびろ学園の発足当初においては、職員は、環境整備のことをあまり気にかけずに利用者との真剣な関わりを行うことを求めていた。そこには、一寸たりとも目を離して

はならない緊張の毎日が送られていたからである。しかし、何年か時間が経過していくうちに職員も入れ替わり、次第にマンネリ化が始まつてくる。責任者たちもこの状況の変化を放置しておけないのでは、機構改革を考えグループ別の責任の強化を図り、その生活の共度を高めるようにした。つまり利用者と職員が共同生活をして、職員の生活環境に対する自我関与を強化していくことにしたのである。直接処遇職員には、第一に人間関係を改善していく、利用者の自主性、自律性を発達改善させていくことが目的となる。しかし第二には、生活の仕方や社会的な行動のマナーの獲得をはからなければならぬ。利用者のモデルとなるような身の回りの清掃や生活用具の整備をはかる能力が必要になってきているのである。つまり家庭の整備をはかる能力が必要になつてきているのである。つまり家庭の能力が必要になつてくるのである。このことは、当然ながら、施設での基本的援助としての対人援助技術と並んで、環境を整える家事能力の向上の必要性を声を大にして求めていかなければならないと思うのである。

子どもの生活研究所

改築金寄付者名簿（順不同）

昨年末より、関係各方面に子どもの生活研究所改築協賛金をお願い致しましたところ、左記の方々より、御寄付を賜りました。紙面を借りて深く御礼申し上げます。尚、紙面の都合上敬称を略させていただきました。

小林陽子・中塚博勝・小原瑞穂
朽尾勲・木村珠江・木村元正
石原桂子・小山悦夫・湯浅正
水口和恵・持田文子・山本博明
黒林美江・村田操・村田堅一
茨木一郎・石川信子・大久保洋子
村岡精一・時永康男・菊地妙子
北原聰史・中原二三・原京子
島田満夫・島田千夏・中島健一
二木俊彦・芳本憲一・富川水門
田中雄一・今井久仁子・佐竹美那
宮本喜久恵・原伸・新井康治
小沼康夫・佐藤泰子・下田明彦
阿部秀雄・渋谷英子・渋谷六郎
五十嵐康郎・岡部礼子・岡田豊
境睦雄・藤田慶之助・喜多克彦
大橋譲策・沢田保邦・栗田総一郎
桜井節子・館裕・野田康生
黒瀬靖郎・佐藤孝子・松井精三
清水正・宮原功・子安昇
田中瑛也・佐藤進・木村文夫
重田信一・菅尾伸二・堀弘子
安富正文・近藤房江・板垣次男
畠瀬稔・小島潔・堪沢和枝
片桐一平・上野雅章・木造信之
倉光修・高橋登紀子・入沢誠八
山田政夫・博山葉子・長谷川英一
浜ノ園利夫・山田譲・坂本やすよ
雅樂川久江・村田保太郎・清水正弘
村井美紀・篠澤達也・山川廣記
大口八郎・伊東真樹・小林三三
鶴原景子・藤原嗣治・浅井百合子
南村眞智子・竹内和子・高田和彦
早瀬進・伊藤正人・伊藤静子
石丸晃子・細見美枝・青木邦之
上田信之・小松京子・田口仁子
山内参二・五井野龍雄・広田照子
江幡玲子・山田久一・橋元隆子
池上嘉信・白尾隆・錦貫光郎
設楽智子・本坂剛・藤宗徳子
馬場禮子・高崎廣・斎藤俊彦
桜井理治夫・長岡格・田中君代
田熊祥子・渋谷仁・三和治
安部知子・藤山礼子・長谷川重夫
菊谷良子・陣野安正・解良明子
中川和人・岩井道子・吉澤一男
金箱光人・井上トヨ子・小山晴生
平瀬邦子・肥田野直・黒澤貞夫
須藤祐司・坂洋一郎・岩永隆勇
布川浩幸・林孝・倉持義男
平野建設㈱

桜井節子・館裕・野田康生
黒瀬靖郎・佐藤孝子・松井精三
清水正・宮原功・子安昇
田中瑛也・佐藤進・木村文夫
重田信一・菅尾伸二・堀弘子
安富正文・近藤房江・板垣次男
畠瀬稔・小島潔・堪沢和枝
片桐一平・上野雅章・木造信之
倉光修・高橋登紀子・入沢誠八
山田政夫・博山葉子・長谷川英一
浜ノ園利夫・山田譲・坂本やすよ
雅樂川久江・村田保太郎・清水正弘
村井美紀・篠澤達也・山川廣記
大口八郎・伊東真樹・小林三三
鶴原景子・藤原嗣治・浅井百合子
南村眞智子・竹内和子・高田和彦
早瀬進・伊藤正人・伊藤静子
石丸晃子・細見美枝・青木邦之
上田信之・小松京子・田口仁子
山内参二・五井野龍雄・広田照子
江幡玲子・山田久一・橋元隆子
池上嘉信・白尾隆・錦貫光郎
設楽智子・本坂剛・藤宗徳子
馬場禮子・高崎廣・斎藤俊彦
桜井理治夫・長岡格・田中君代
田熊祥子・渋谷仁・三和治
安部知子・藤山礼子・長谷川重夫
菊谷良子・陣野安正・解良明子
中川和人・岩井道子・吉澤一男
金箱光人・井上トヨ子・小山晴生
平瀬邦子・肥田野直・黒澤貞夫
須藤祐司・坂洋一郎・岩永隆勇
布川浩幸・林孝・倉持義男
平野建設㈱

三宅彰・柳田宇一・大竹政宏
小林正子・黒田瑛・福田富美子
福田正蔵・荒井恒夫・佐々木義郎
正木悦子・長谷川正美・長谷川十子
浅野一郎・原田禎三・高石史人
網野武博・花坂ちとせ・宮原要
磯部保・石塚貞子・長田卓也
小林良二・武井慶彦・北原雄治
柏木道子・大塚ちあき・清水敏
小原ナツ子・市川すみ・木村孝雄
紺野史子・坂東久美子・小野数子
南村昇・後藤よね・吉田正宣
浅木ヤス・松村瑞子・川島孝子
石井哲夫・平田慶子・橘鷹正彦
村上勝彦・篠田惠季・保川裕康
前川長慶・野田藤武・三浦里恵
小掠吉晃・古川孝順・小池昇
新妻王計・沢野圭子・田中直子
平野フサ子・高田昇一・福原真知子
細井洋一・野澤正子・佐瀬睦夫
林潤一郎・井出守安・榎本イト
富士火災海上(株)
アオイ住建
富士火災ふれ愛俱楽部
すこやか保育園
医療法人社団至空会
陽清学園
㈱福祉新聞社

(自..平成10年4月至..平成11年3月)

職員の思い

黒田 信

「職員の思い」ということで原稿の依頼がきた時に、文章力のない私としてはどの程度のものが書けるか心配しましたが、現在私が思っていることを書いて見たいと思ひます。一昨年の秋に娘が生まれ、現在育児というものを体験しています(といつてもカミさんや両親に頼る部分が多いのですが)。自分の娘を見ていると、泣いたり笑ったり、食事の途中でイスから立ったり、私の手をひいておもちゃ箱のところまでつれていったりいろいろなことをしてくれます。その行動の中には親の意にそぐわないこともあります。よくよく考えてみると「だめでしょ」と言ってしまうことがあります。

私がここ、嬉泉で働きたいと思ったきっかけは、学生時代に嬉泉が毎年夏に行っている自閉症実践療育セミナーに参加した事であった

する「うがしたかったんだよね」という言葉です。相手の気持ちをくみとて受け入れていくという私たちの仕事の一一番根っこにあるものではないかと気がつきました。

『今頃気がつくくな』との声が聞こえてきそうですが、「親」という立場になって初めて見えてくる物もあるんだなあと思います。そういう意味では我が娘もスーパーバイザーではないかな、と思って

しまいます(親バカも入っていますが)これから、まだまだ勉強していくことはたくさんあり、いろいろな人や物からいろいろな物を吸収していきたいと思います。みんなさんのまわりにもかわいいスーパーバイザーがいるかもしれませんよ。(子どもの生活研究所)

内田 麻子

「見てみたい」と思い、その思ひがかなつて嬉泉で働くようになつてこの春で7年目を迎えることになりました。無我夢中で仕事に慣れることだけで精一杯だった新人

(赤塚福祉園)

の頃、ちょっと余裕の出てきた2

ように記憶しています。

セミナーでの講演はどれも難しく、眠気を誘う司会者の心地好い

声に意識が何度も飛びました。しかし、そんな中でも石井所長の講演だけはなぜかしっかりと聞いていたように覚えています。その当

時の私には、石井所長の講演の内容も受容的交流療法がどういう物かも、これっぽっちも分かりませんでした。(今でも知り尽くした

とは言えませんよ、もちろん。)

でもなぜか私を引きつけるものがそこにある、「とかく閉鎖的に

なりがちな福祉施設において、自らの実践をセミナーという形で他

に開放する。それにはその実践によほど自信があるのだろう、見て

みたいな」そんな気持ちになりながら、壇上の石井所長を見ていた

ように思います。

「見てみたい」と思い、その思ひがかなつて嬉泉で働くようになつてこの春で7年目を迎えることになりました。無我夢中で仕事に慣

大瀧 満

袖ヶ浦のびる学園の嘱託講師の阿部秀雄先生は週に一度学園を訪

年目、初めて責任を持つことになった3年目、赤塚福祉園更生施設へと異動した4年目…。7年目の今は更生がら授産へと異動になりました。毎年異動があって、仕事の内容が変わる職員に比べれば、

不器用な私にはちょうど良い恵まれた環境で利用者の方々に接する機会が持ててきました。日々繰り返される仕事に追われる毎日ですが、その事に甘えず、

「受容」ってなんだろう?」「利用者主体」ってどういう事だろう?「相手の立場になつて考えるって…」などなど常に考えていました。そして「嬉泉で働きたい」と思った最初の気持ちを忘れずに、ここに携わる利用者の方たちにとって自分ができる事を探しに行きたいと思っています。

れ、抱っこ法のセッションや職員の研修を目的とする講義を行っている。抱っこを中心とした相互交流の中で、利用者が身を任せてゆつたりとできる経験や、内面に秘められているつらい気持ちの表出を助けたり、その癒しを行う。また、母親や援助者が利用者に対して主体的に関わっていくことができるよう援助している。

阿部先生と私の出会いは4年前

前、当時、私が担当していたAさんという女性の利用者と一緒に抱っこ法のセッションに参加することになり、そこで初めて出会った。大きな体のその人は優しげな微笑を浮かべ、たどたどしい私の話をすら「うん、うん」と聞いてくれた。内向的な私でも親しみやすさを感じたことを覚えていて。まだその当時は私も働き初めて2、3年目というところでなかなか利用者を理解できずにいた。セッションの中の筆談で現されるAさんの気持ち（不安や期待、絶望と希望）には「そうは言つてもやつていてことは……」とAさんの気持ちに

共感できなかったり、私に投げかけられる期待を知るにつれ、「私はそんな力などない」「買ひ被らないでくれ」と逃げ出したい気持ちさえ持つようになった。そうした気持ちを聞いてくれたのは阿部先生であり、利用者の抱えていた不安やどうにも出来ない様子を教えてくれたり、そうした利用者との付き合い方を示唆し、利用者と向き合うことを手助けしてくれた。

「利用者の人と自分がいかに向き合えるか」、この職業を選んだ者としてこの課題に取り組む責任を強く感ずると共に私の未熟な心もいつしょに抱きとめ、手助けしてくれた阿部先生に感謝している。
(袖ヶ浦ひかりの学園)

川相 豊子

ばれる。

高校生の時、「自閉症児がふえている」を読み、受容的交流療法に魅かれ、石井所長のもとで自閉症と呼ばれる人達といっしょに暮らし始めていつしか20年余り。向き合いたいのに向き合えなくて悩んだり、やっと共感できたのに問題を解決してあげる術がないと自分を責めたり、上司におもいを伝えきれず、涙で文字をじませながら、石井所長に状況を訴えたこともあった。

本籍も住まいも学園の敷地内という我が家だが、娘の成長につれ、地域との接点が生まれ少しづつ風が入るようになった。

家庭と仕事の間で揺れた。自分自身を見つめ直すとハコミセラピーを学び始めた。

あるがままを受け容れながら自分らしさを發揮して、仲間たちと一緒に生きてゆきたいと願うものの、苦い思いは次々と押しよせてくる。

そんなある日、抱っこ法のセッションで、こんなメッセージをもつてくから のびろで手をつなごう のびろ ばんざい (筆談)』



(袖ヶ浦のびろ学園)

心から仕事してんだから 一人じやないから だいじょうぶ かわってくから のびろで手をつなごう のびろ ばんざい (筆談)』職員にエールを贈り、私達を抱き寄せてくれたのは自閉症の青年だった。――支えているつもりが、支えられている――涙があふれ肩の力が脱けて、喜びをかみしめるうちに、「社会参加」は彼らの為だけではなく、地域の人々にも大きな糧をもたらすのではないかという気がしてきた。

ひかりのファームでは、小麦が真っ青な穂先をすぐっと立て、さやきながらやわらかに波打っている。都忘が、精いっぱいに咲いている。ふと、今はもうまばろしの『嬉泉あられ』を食べてみたいと思った。地域の人々にも味わってもらえるだろうか。五月の空に、ふわっと白い雲が浮かんでいた。

(袖ヶ浦のびろ学園)

嬉泉の出来事

第15回自閉症治療教育実践講座

実践講座

第15回自閉症治療教育実践講座が2月12日、13日の両日にわたりて袖ヶ浦のびる・ひかりの学園と幕張の海外職業訓練協力センターを会場に開催しました。今回は「自閉症者の自立支援」をテーマに、自閉症者の地域での自立にむけてのケアマネジメント、自立支援の実際を取り上げました。

一日目は学園利用者の作業と強度行動障害棟を中心とした見学の後、ケアマネジメントの第一人者大阪市立大学教授の白澤政和氏を招き、石井哲夫所長とともに自閉症や重度の障害者へのケアマネジメントと自立支援の留意点を中心としたシンポジウムが行われました。また、一日目には受講生が4グループに別れての分科会が企され、活発な討論が行われました。二日目は会場を幕張に移し、自閉症の自立支援と題し、あさけ学園

の西野氏と星ヶ丘寮の明庭氏から具体的な事例に基づき、自立生活の支援ならびに自立に向けての職場実習援助の実践報告がおこなわれました。午後からは強度行動障害への取組として、大島藤倉学園の橋本氏と袖ヶ浦のびる学園の北川によって両学園の実践の報告がありました。大島藤倉学園からの利用者を袖ヶ浦ひかりの学園で受け入れ、行動障害の改善、軽減に取り組み、また大島藤倉学園に戻るという経緯のなかでの行動障害改善に向けての課題、問題点を明確にしていくというものでした。コメンテーターの石井哲夫所長からは援助者の自己覚知ということが強調されました。

(めばえ学園園長 川相 智史)

地域療育推進棟の完成

中央競馬馬主社会福祉財団助成による地域療育推進棟が完成し、12月16日に落成記念式が行われました。袖ヶ浦における地域療育は

地域療育推進棟は総面積1,833・36m²の鉄骨コンクリート2階建てで、一階部分は個別セッション等を行う指導室となり、2階には相談面接室とショートステイ用の個室が2部屋用意されています。

赤塚福祉園においては、これまで、宿泊旅行をはじめとした利用者の方々の外出の際は、通所バスやレンタカーなどを利用しており、近隣の少人数の外出などの場合であっても通所バスを利用していま

長年、母子入園事業を中心に行つてきましたが、徐々に制度に則つた療育事業に切り換えてきており、平成7年度からは千葉県、ならびに千葉市と「外来及び巡回療育相談」「生活能力訓練事業」を受託契約し、地域療育事業を積極的に展開してきました。県内の自閉症を中心とした発達障害児者に広く相談ならびに療育の場を提供してきました。特に、就学前の相談と卒後の在宅の方の生活支援のニーズが高まっていますが、相談に関しては個別セッションを設定するなどの配慮を行い、生活支援に関しては袖ヶ浦ひかりの学園の諸機能をひろく開放してきました。相談や個別セッションは学園の既存の面接室等を使用してきましたが、面接等が重なることも多くなり、相部屋の調整も難しくなりました。また、ショートステイのニーズも増え、地域療育専用の建物への要望が高まり、今回の地域療育推進棟の建設となりました。

去る2月4日(木)、社会福祉法人嬉泉に対して、赤塚福祉園の利用者の活動に使用するために、車両(ハンディキャブ・トヨタハイエースウエルキャブ仕様)が寄贈されました。寄贈主は、株式会社安田屋という板橋区内を中心とする企業で、企業の社会活動の一環として、板橋区内の福祉施設に対して寄付をしたいという申し出が板橋区にあつたものです。

来談者にも利用していただこうと思っております。

平成10年度から袖ヶ浦ひかりの学園が地域療育等支援事業の指定を千葉県から受け、訪問療育、外来療育、地域生活支援、施設支援指導の事業を展開しております。

た車両は、車椅子用のリフトや車内に固定する装置がないものでしたため、不便を感じていました。そのため、以前から車椅子のまま乗り降りができるタイプの車両の要望が出ており、板橋区に対する予算要望や助成団体への要望を行なってきました。そこへ、今回の件が板橋区から打診されたため、またとない機会であると要望させていただきました。

寄付が決まり、板橋区から連絡を受け具体的な車両選定を行なうこととなりましたが、この間も、株式会社安田屋の皆様を始めとして関係者の方々には、多大なるご協力を頂き、感謝致しております。当日は、板橋区役所において板橋区長立ち会いのもとで法人に対し目録の贈呈が行われました。その後、赤塚福祉園に場所を移して車両の贈呈式が行われ、株式会社安田屋の関係者の皆様、板橋区厚生部福祉課長など多くの方々のご出席をいただきました。福祉園で行われた贈呈式には利用者の方々も出席し、自分たちの自動車が来たと大変喜んでいました。また贈呈式終了後、寄贈された車両をパックに利用者の方を交えた記念撮影が行されました。

今回寄贈された車両は、車椅子利用者が2名乗車でき、車椅子の利用者が2名乗車でき、車椅子

のままの乗り降りが可能なタイプです。また、乗降のためのリフトについても、衝撃を感じることもなく、快適に利用することがであります。寄贈後、車椅子の利用者で外出で使用したりしていますが、今後、様々な用途で活用し、利用者の活動の幅が広がるようにしていきたいと考えています。

(赤塚福祉園 小池 朗)



寄贈されたハンディキャブ

おおらか学園の創設

私たちとは、長年、自閉症をはじめとする発達障害児・者とその家族とのかかわりを重ねてきて、それらの経験をもとに、この世田谷

の地で、学校卒業後の年齢の人たちが毎日安心して通える通所施設についても、衝撃を感じることもなく、快適に利用することがであります。寄贈後、車椅子の利用者で外出で使用したりしていますが、今後、様々な用途で活用し、利用者の活動の幅が広がるようにしていきたいと考えています。

その際、私たちがまず、課題として取り上げた内容としては、(1)自閉症に限らず発達障害をかかえ、知的能力の如何にかかわらず、家庭や地域社会の枠組みの中で不適応状態を示す人たちへの適切な理解と援助を行うこと、(2)障害者の生活を支える家族への支援を親身になって行うこと、の2点です。これらは、いずれも障害をもつ人とその家族から発し、その人たちが安心し、納得して、生き生きとした生活を送ることができるようにながつたものです。とかく、一般社会の風潮としては、「出来ないことを出来るように」「おかしなことはやらないように」「より生産性の向上に努め、無駄なことは無くしていく」といった事柄が「良いこと」、「大人になること」として評価されるようです。この

おおらか学園の開設は6月でしたが、今年度入園予定の8名のうち6名を4・5月に仮園舎で受け入れ、開設前の実習を行いました。新しい学園生活を2ヶ月過ごしたところで、私たちがあらためて気づかされたこととして、この人たちの人としてのプライドや人から認められたいという前向きな気持ちがしつかりと育つてきているということです。このことは、保護者の方などこの人たちをとりまく人々と共に大切に思い、社会生活中で生かされていくよう援助を行っていきたいと考えています。これまで、私たちが培ってきた援助の気持ちや経験を、この新しい地域援助サービスのしごとに置いて、より生かしていくために、世田谷区をはじめ関係諸機関の方々や保護者の方々とのつながりをより一層深くしていきたいと思っています。

(おおらか学園園長 石橋悦子)

ピカデリー就職について

袖ヶ浦ひかりの学園

秋山 良江

私は今年の10月からエルローズひかりの出張所ピカデリーに就職しました。だが、研修はたったの一週間だけで終わってしまいまし。研修を4日間だけ行い、採用試験にも合格しました。研修期間の次の週に入社式を行いました。そして、ピカデリーの仕事は、人に頼らなくとも自分でテキパキと出来るようになりました。でも、ちょっと困る事は、「丁寧な言葉で話せ」と云われる事です。これは、研修期間の時から散々言われました。いつもの様に普段の言葉で話せないのが、ピカデリーでの辛い所です。それに、「時間（普通の作業時間より早いので）迄に勤めろ」と言われるので、なかなか大変なようです。でも、なんとかして時間までに準備をしてピカデリーに出勤しようと思っています。ところが、私はまだ完全には慣れないで、ちょっと忘れる

ひかりのタイムス

独立第35号

ことや分からない一面もあるようです。そして、履歴書までも自分できました。前々から、お給料がたくさん貰える事を願つて就職したいと思いました。でも、休憩時間をとつても辛いのに、休憩なしで仕事をすると、なおさら辛い仕事を感じられます。一度、箱詰めする仕事はちょっとリヤカーでエルローズ千葉センターまで運ぶので、余計に辛い仕事です。でも、段々に慣れてきておりますので、最初の時は大変な気は致しません。この頃は、サインをする所までも自分で行っていますし、リヤカーを借りる所も自分でやっています。数を数える所から納品まで、今現在、私が全部自分でやっております。ところが、納品の際、挨拶をする事を時々忘れたりする事もございます。最初の頃は5箱やつておましたが、10箱に変わった時、凄く大変なようになります。工藤さんが私と同じく辛い氣が致しましたが、大分慣れてきましたら、そんなに辛い気はしなくなりました。何しろ、お金の

為にテキパキ頑張ろうと思つてますので、ここでくじけないよう以致たいと思つております。でも、もう一つ困ることは、「身だしなみに気を付ける」ということです。「時間までにサッサと準備しろ」と言われているので、それまで色々と準備を済ませるのがもとでも大変だという気がします。仕事で実績をたくさん積んで、つづきが学べたような気もします。仕事にテキパキ済ませて、出勤しようと努力しております。始めのうちは、大分緊張しましたが、今はもう、とっくに慣れてきています。だから、楽しい気もします。

でも、細かいチェックもしないといけないので、ある部分には充分注意しながらやつておきます。だから、何回も数え直しをしなきゃなりません。それでも、段々に面白いような気もしますので、楽しい所がとても大変です。それでも、段々に面白いやうな気もします。しかし、研修中である

ピカデリーという仕事は、一般の会社『エルローズ』の下請け（エルローズ出張所）として今回新たに始めた仕事です。

秋山良江さんの場合、ピカデリーという仕事を始めるにあたって、今までの作業の延長ではなく、社会人としての自覚がもてるようになります。工藤さんの事を池田先生から聞いて、「まだ私ほど、上手にできないらしいね」とつくづく想います。早く、工藤さんも私のように正式に就職できるよう祈っています。私は先輩として、完全に慣れていない研修生の工藤さんを応援しています。そこにいくと、正式に社員をして仕事を行っている私は、もう何から何まで完全にパッパーと手際良くきちんと出来ています。そこには、工藤さんが私と同様、正式な社員になればいい」と私は心から願つ

ております。しかし、こうして原稿を書いている私も、熱中すぎるとほど熱中しておりますが、これもとても大変だという気がします。やはり、私はピカデリーでどんなことでもやれば出来るということでも引っ越せるよう頑張りたいと思います。

ピカデリーという仕事は、一般の会社『エルローズ』の下請け（エルローズ出張所）として今回新たに始めた仕事です。

秋山良江さんの場合、ピカデリーという仕事を始めるにあたって、今までの作業の延長ではなく、社会人としての自覚がもてるようになります。工藤さんの事を池田先生から聞いて、「まだ私ほど、上手にできないらしいね」とつくづく想います。早く、工藤さんも私のように正式に就職できるよう祈っています。私は先輩として、完全に慣れていない研修生の工藤さんを応援しています。そこにいくと、正式に社員をして仕事を行っている私は、もう何から何まで完全にパッパーと手際良くきちんと出来ています。そこには、工藤さんが私と同様、正式な社員になればいい」と私は心から願つ

ております。しかし、こうして原稿を書いている私も、熱中すぎるとほど熱中しておりますが、これもとても大変だという気がします。やはり、私はピカデリーでどんなことでもやれば出来るということでも引っ越せるよう頑張りたいと思います。

ピカデリーという仕事は、一般の会社『エルローズ』の下請け（エルローズ出張所）として今回新たに始めた仕事です。

秋山良江さんの場合、ピカデリーという仕事を始めるにあたって、今までの作業の延長ではなく、社会人としての自覚がもてるようになります。工藤さんの事を池田先生から聞いて、「まだ私ほど、上手にできないらしいね」とつくづく想います。早く、工藤さんも私のように正式に就職できるよう祈っています。私は先輩として、完全に慣れていない研修生の工藤さんを応援しています。そこにいくと、正式に社員をして仕事を行っている私は、もう何から何まで完全にパッパーと手際良くきちんと出来ています。そこには、工藤さんが私と同様、正式な社員になればいい」と私は心から願つ

ております。しかし、こうして原稿を書いている私も、熱中すぎるとほど熱中しておりますが、これもとても大変だという気がします。やはり、私はピカデリーでどんなことでもやれば出来るということでも引っ越せるよう頑張りたいと思います。

ピカデリーという仕事は、一般の会社『エルローズ』の下請け（エルローズ出張所）として今回新たに始めた仕事です。

秋山良江さんの場合、ピカデリーという仕事を始めるにあたって、今までの作業の延長ではなく、社会人としての自覚がもてるようになります。工藤さんの事を池田先生から聞いて、「まだ私ほど、上手にできないらしいね」とつくづく想います。早く、工藤さんも私のように正式に就職できるよう祈っています。私は先輩として、完全に慣れていない研修生の工藤さんを応援しています。そこにいくと、正式に社員をして仕事を行っている私は、もう何から何まで完全にパッパーと手際良くきちんと出来ています。そこには、工藤さんが私と同様、正式な社員になればいい」と私は心から願つ